だから職員が辞めていく
ダメな施設を選ばないために 15

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2014-09-17
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 岡田, 耕一郎, 岡田, 浩子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/227

だから職員が辞めていく

ダメな施設を選ばないために

15

チェックポイント⑭

「夜勤の介護がひどい」

夜勤の介護については、従来からさまざまな問題が提起されてきた。利用者にとって劣悪な介護が提供されている点や、職員にとって過酷な勤務になっている点であるが、なかなか改善されているとは言い難い。

そこで、今回は就職先として老人ホームを選ぶ際のチェックポイントとして、「夜勤」を取り上げてみることにしよう。

夜勤業務は、職員がローテーションを組んで交替しながら日替わりで担当する施設と夜勤専門の職員を置く施設がある。ローテーションを組む場合は、変則勤務という深刻な問題を抱えることもあるので注意しなければならない。

たとえば、従来は夕方から出勤していた夜勤帯の勤務時間を「7時～11時と21時～翌日の10時」の2つに分け、朝食介助をこなしてからいったん自宅に戻り、休憩したのち出勤して、遅めの夜勤に入る変則的な勤務がある。施設にとっては、夜勤の時間の長さはそのままで、朝食介助の人数を多めに確保できるわけだが、それを強制された職員にとって、2分割の勤務は、大きな精神的なストレスになる。

というのは、従来型の夜勤であれば、夜勤者にとって、夜勤前日の夜は比較的ゆっくりと自由な時間を過ごせる貴重な時間で、友人と一緒に遅くまで飲んでいたとしても、翌日の出勤時間は夕方近くなので、精神的に安心してリフレッシュできる。しかし、2分割されると、夜勤に入る前に「7時～11時」まで勤務をしなければならないので、前日も普段通りの規則正しい生活を強いられ、また退勤後、いったん自宅に戻り、再び出勤しなければならないため、自宅でくつろげる時間は限られてしまう。

これは、法律上、問題はないとはいえ、現代においては精神的な労働強化と受け止められても仕方がない。このようにして、介護職員の勤務状況が精神的にも肉体的にも劣悪になりやすい環境が自然につくられてしまうと、職員はいずれ燃え尽きてしまう。

さらに、厳しい状況に追い込まれているのはユニットケアの夜勤だ。夜間になると閉ざされたユニットの全利用者を自分一人でみなければならない。か細いこの自分の手で、朝まで利用者を守りきれるのか考えると、大抵の若い職員はその恐怖で精神的にまいってしまう。

精神的に追い詰められる職員も

ともかく夜勤業務は、伝統的に組織的・構造的な問題を抱えている。それは夜勤時に配置されている職員数がそれほど多くない（ひどく少ない）ことであり、それに付随するさまざまな問題である。ユニットケアのように日勤帯も夜勤帯も職員が消えてしまっているようなところは論外であるが、普通の老人ホームでも日勤帯に比べて夜勤帯はぐっと職員の数は減ってしまう。

日勤帯には提供しなければならない介護サービスが多いため、限りある職員の中から日勤帯に振り向ける職員数を多くしなければならず、その結果、夜勤帯に振り向けられるのが少なくなるのは当たり前である。その場合、現場にいる職員の数と彼らがこなすことができる仕事の量が一致していればそれほど問題は大きくないのかもしれないが、実際には大抵の介護職員は翌日になるとフラフラになっていることからも分かるとおり、仕事の量がはるかに多すぎる。

介護職員は決して夜中に勝手にどんどん仕事を作っているわけではなく、どちらかというと利用者の方が積極的にナースコールを押して仕事を作り出す。このような、ややこしい問題を昔から現場は抱えてきた。

実は、利用者にとっても夜勤は深刻な問題だ。職員の数が減る夜間は、問題のある介護職員が暴走しがちだからだ。

ある老人ホームがオープンして数年たち、軌道にのりつつあった時のこと、一人の介護職員が、職員共通の介護理念を掲げてはどうかと提案した。この介護については、このようにして仕事に取り組もう、という介護職員の行動規範を、明確に文章にすることを求めたのである。

彼女の提案に、介護部門の管理職は「あなたは福祉の理念を知らないから、そんなことをいうのだ。他の職員は全員知っているので必要ない」とたしなめた。さらに、彼女に反省を求めて詰問するようなことまであったのだが、実は、その介護職員には、理由があった。

利用者の多くが、夕方が近付くと、夜勤が誰かを気にかけ、「今夜の夜勤さんは誰ですか」と、しつこく聞く人までいたからである。介護職員が注意深く観察を続けると、その利用者は夜になると、たびたび大便をして、一部の職員からきつく叱られていたことが分かった。夜間に大便をしたことを非難され、人格まで否定されるような怒鳴り声に震えている利用者。

そこには、「私が夜勤の時にはナースコールはほとんど鳴らない。夜勤に入る前に、利用者全員をにらみつけるからだ」と豪語する職員に対して、なすすべもない利用者がいる。

利用者にしてみれば、恐らく「どうか今夜の夜勤は○○さんではありませんように」と祈るような気持ちだったのだろう。誰が介護するかで、利用者の安心感がこれほど違っても良いのだろうか、そんな素朴な疑問を持った介護職員の良識も、介護現場ではつぶされていく。

以上のように、就職先として老人ホームを選ぶ際には、「夜勤」は重要なチェックポイントになる。職員の精神や肉体がすり減ってしまって燃え尽きるような夜勤のシフトを組んでいる施設、介護職員一人ひとりの良識や常識がつぶされるような施設にはなるべく近付かない方が安全だ。

岡田耕一郎（おかだ・こういちろう）
東北学院大学経済学部教授。経営組織論。日本、スウェーデン、ドイツの介護サービス組織のマネジメントを研究。

岡田浩子（おかだ・ひろこ）
介護福祉士、社会福祉士。共著として07年に『老人ホームをテストする』を暮しの手帖社から出版。